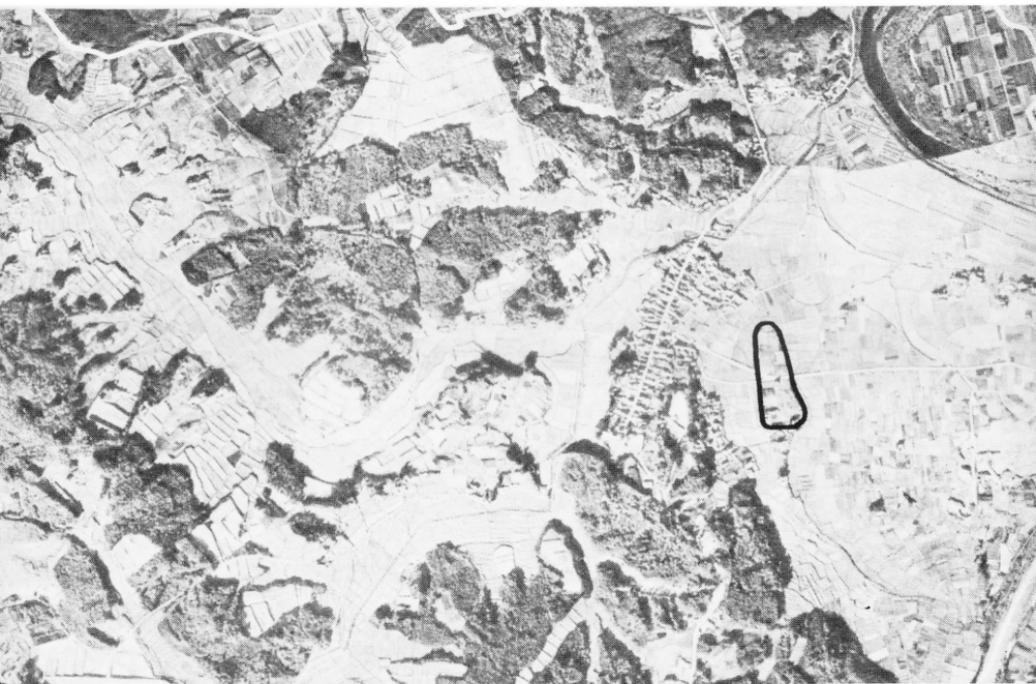


矢吹町文化財調査報告第5集

# 古館遺跡調査報告



1982年3月

福島県矢吹町教育委員会

## 序

このたび古館遺跡の発掘調査を福島県文化課の渡辺一雄先生に依頼して実施致しました。この遺跡は鎌倉時代から戦国時代の末期にかけての館跡と考えられます。矢吹町にはこのような館跡が多く、この調査により、当時代の歴史が明らかになるとともに、我々の祖先の遺業も一つ一つ実証されて参ります。

こうした祖先ののこした「埋蔵文化財」を大切にするとともに正しく調査して歴史資料としてのこすことも我々のつとめと思います。ここに報告書をまとめるとともに、今後の調査研究にご活用頂くことを切に望みます。調査に当りましては関係者の皆様の御協力御努力に深く感謝の意を表します。

矢吹町教育委員会

教育長 酒 井 正 敏

目 次

序	文	
目	次	
第1章	調査経過	(星) … 3
第2章	遺跡の位置と環境	(星) … 5
第3章	調査結果	6
第1節	井戸遺構	(星) … 6
第2節	出土遺物	(渡辺) … 7
第4章	まとめ	(渡辺) … 10

# 第1章 調査経過

## 昭和56年6月10日

矢吹町教委社教係の星が古館遺跡の北端部を現地視察した際、石棺と思われる石片を発見したのでボーリング棒で検地したところ、表土より20～30cmの深さの地点に石棺が存在すると思われた。畑作地であるので今後の耕作で石棺が損われるおそれがあるため、盛土による保存を考慮することとした。

また、遺跡の北端部が水路によって掘削され、水田畦畔に合口甕棺様の土器らしき断面が発見されたので、上記の点と合わせて県白河農地事務所、町産業課、矢吹土地改良区とその保護保全について協議を行った。

この際、県教育庁文化課とも連絡をとり、その指導を得て協議した。その結果、水田畦畔のため秋の稲刈の後に調査を実施することと決定した。

## 56年12月15日

矢吹町三神地区のほか場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査について、県白河農地事務所には調査費の負担と重機の協力を依頼し、また、県教育庁文化課には調査担当者として専門文化財主査渡辺一雄を依頼して指導をいただくこととした。地元からは仮換地ではあるが地主の調査協力を得た。調査員としては町教委の担当者と町文化財保護審議会委員関根保夫があたることとなった。

## 56年12月25日

朝9時現地集合。ただちに作業を開始した。はじめにあらかじめ遺構の保護のため埋設しておいたヒューム管を重機により取り除いた。ただちに埋土をはいで旧状に復した所土器断面と

思われるものは、かなり大きくかつ壁面には土器がないので、あらためて上面で遺構を確認することとした。その結果当初考えられた土器ではなく円形の土坑であることが判明した。そこで古館遺跡に伴う古井戸である可能性が強くなり、内部を調査した結果やはり古井戸であったことが確かめられた。

古井戸内からは有機物がかなり多く検出されたが、それとともにクロコ糸切り底の土器や自然木片と異なる木製品が検出された。

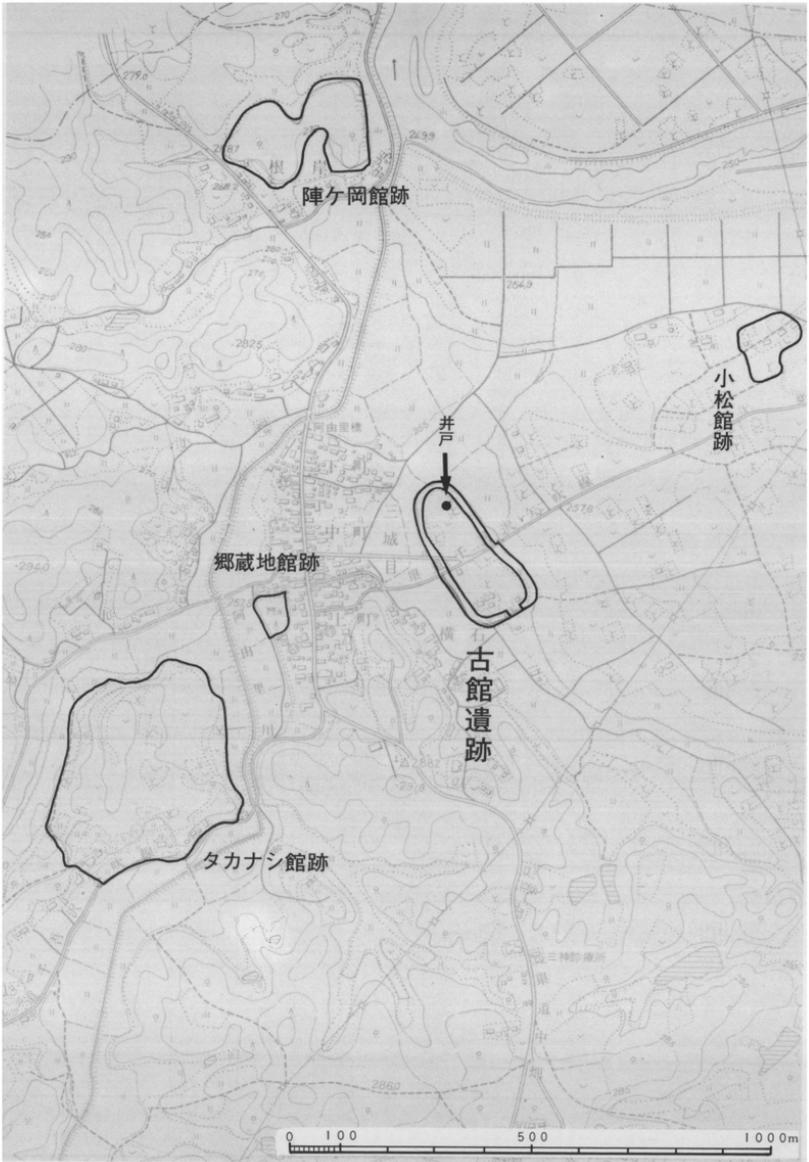
## 56年12月26日

朝9時作業開始。掘り下げた井戸の中に水が溜ったのでくみあげる。昨日に引き続き下を掘り下げるが、井戸枠周辺の砂のくずれが著しく、また井戸底にも達したので、掘削をここで終了する。

土器片木製品等の遺物をとりあげ、写真撮影、実測を終り作業を終了した。

## 57年1月～2月

土器及び木製品の実測・写真撮影は、県教育庁文化課分室へ運び、担当者の方で行い、報告書執筆は両教委担当車で分担執筆した。



第1図 古館遺跡と井戸配置図

## 第2章 遺跡の位置と環境

**位置と地形** 遺跡は矢吹町の東北部、現在の三城目集落のすぐ東にある。南北に縦貫する阿武隈川の氾濫原に接した河岸段丘上にあり、東西80m・南北150mの広さをもつ平坦地である。標高は254mで、周囲をめぐる水濠の跡である水田からの比高は約1.5mである。この古館遺跡内の北端に近い井戸跡が調査地である。

**古館の概要** この館跡は、中畑家の家臣(乗馬衆七番士)で泉川弾正(大学介)の時から居城しており、中畑晴時の頃は泉川左馬介が居城したことが考えられる。(相楽定邦氏文書)この館跡は沼館の縄張りによるもので、現況は水濠が水田と化し深田である。館は南から前・中・後の各曲輪よりなり、礎石などが出土しているところから、ここに建物群が存在していたことがわかる。

今回の井戸跡は、中曲輪の北端東りに位置するものである。

また、この台地から組合せ石棺が出土しているところから、かつて古墳が存在していたものと思われる。

**周辺の遺跡** 古館遺跡は、鎌倉時代から戦国時代末期にかけての遺跡と考えられるが、周辺の遺跡にも深いかかわりあいをもつものがある。

平安時代には石川氏の矢吹地方の支配が及び、鎌倉時代末期には白河氏の領地と界を接し、当時の主要官道である東山道が三城目を通過しており、その立地から見て微妙な位置にあったと考えられるが、付近には三城目地内にあるタカナシ館・小松館・郷藏地館・陣ヶ岡をはじめ、須乗の物見館・明新の明新館・中畑の国神館・観音山館・矢吹の袖ヶ館・大和久の大和久館な

どが存在する。

中世矢吹のなかでの領有関係にもとづく地頭領主相互の力の均衡上、これらの城館が各要地に設置されたものと考えられるが、この城主館主等の名は言い伝えとして残っているものが多いが、正確なことは不詳である。中世史料に散見される館としては、中畠氏の観音山館、ついで矢吹氏の袖ヶ館、伊藤氏と中畠氏とかかわりをもつタカナシ館である。



第2図 三城目村絵図部分  
(目で見える矢吹町史より)

## 第3章 調査結果

### 第1節 井戸遺構

ほ場整備事業による整地作業のため、井戸の上部はどの程度削平されたのかは全く不明である。調査時にはほ場整備による工事で、井戸遺構は畦畔部にかかり斜めに掘削され、上部には畦畔の盛土が数10cmあった。

調査はまずこの新しい盛土を取り除き、井戸の円形の輪郭を確かめることから始った。それから井戸内部の埋土を排土する作業にとりかかった。約1m掘り下げのまでは重粘土で褐色を呈する土層が続き、堆肥状の有機物が多量に混入していた。この上層部からロクロ引き糸切底の土器片が検出された。

さらに掘り進めると、有機物は上層と同じく多く、粘土は砂質となり青白色に変化していた。井戸の残存部上面から1m～1.5mあたりには、草木の腐食物が多い。それらの中から箸状のものや薄い木片で左右に切り込みのあるものなどが数点検出された。明らかに自然物でなく、人工遺物であることがわかる。

1.5mよりさらに掘り進めるとだんだん砂質



第3図 遺構の遠景



第4図 発見時遺構状況

になり、井戸の周辺の砂層がくずれるようになる。井戸はきれいな円形で、壁面をおさえるために、細い竹や長い木を縦にならべていることが、残存する木質物からわかる。この竹や木は井戸の下方のみに使用されたようであり、上方では10cmほどの幅の縦の線がきれいに残る。ちょうど種の縦板のような感じである。おそらく板を円形に並べたと思われるが、板そのものは残っていないし、板をどのように内側から押えつけていたかも不明である。

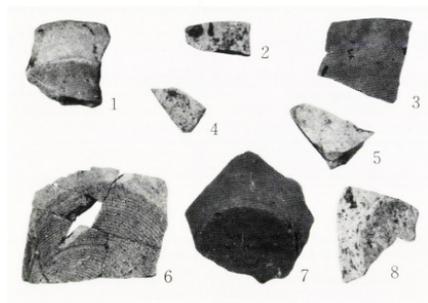
中・下層の遺物には次のようなものがあった。1.5mの砂質粘土層からは「スモモ」と思われる種子が数点発見された。また小破片の土器片もあった。

## 第2節 出土遺物

**土器** 第5図2と3は杯の口縁部破片と思われる。いずれも明褐色であるが、2の方が赤味を帯びている。3は口縁部に近づくにつれて薄くなり、5mmから2mmとなる。口唇部は丸味を帯びている。内外面に細かなロクロ整形による横走る線が観察されるが、指頭・布・皮などのいずれを使用したものかは決めることができない。井戸内上層部より検出された。3は2より器厚はさらに薄くなるが、厚味は一定しており3mmほどである。口縁部はやや内弯し、口唇部は内外からナデたため中央に稜を形成している。内外ともロクロ整形による細かな線が横にみられる。井戸の現存部上面より1mの地点で検出された。

胴部破片はわずかに小破片1点のみである。

底部破片は5ヶあるが、1と5は同一の底部破片である。1と7は碗の底部と思われる。1は底部の整形ははっきりしないが、高台のような低いつくり出しがある。7も同様であるが、回転糸切痕を底部に残す。1はやや軟質であるためか、整形の痕は不明である。8は杯と思わ



第5図 出土土器



第6図 井戸内堆積土の状況

れるが、小破片のためはっきりいえない。底部整形は明らかで、他と同様に回転糸切痕を残している。

6は底面が大きく平らである。底にはきわめて明瞭な回転糸切痕を残す。おそらく他と異なる杯の底部片と思われる。内面には中央付近を中心として、細かな円形にまわる整形痕がみられる。底部の厚さは5mmである

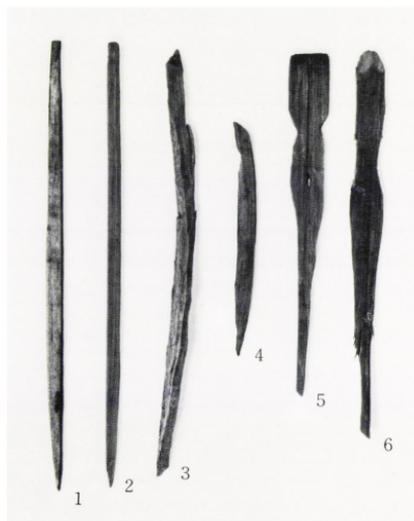
以上の土器の破片は、土器の色はやや異なるものがあるが、胎土はいずれも細かく焼成も比較的良好であるといえる。

このような土器の名称、時期などについては未研究の分野に属するので、ここでは資料の増加を待つこととしたい。

**木製品** 井戸内には多量の腐食した木片や木葉と思われるものが混入していた。その中に11点の木製品がふくまれている。

木質はほとんどが杉であり、目の細かな点からみてもかなりの大木を利用したものであろうと思われる。

第7図1と2は箸の形をしているもので、一方の端を尖らせている。1は先端部が丸く多少磨滅したような感じであり、使用した跡と思われる。2の先端は両面から削ったため薄く刃状になっていて、箸として使用したようにはみえない。断面はいずれも不整四角形である。2本とも近くから一緒に出土しているが、長さは約20cmと似ていても、先端部の形状や使用痕などからみて一対のものではなさそうである。3は多少カーブを有するが、長さは19cmで両端は削ってある。



第7図 木製品(1)

5は長さ15cmで上部の幅が広く下部は細長くなっている。上から6cmほどのところに幅1mm長さ4～6mmの縦長の穴が貫通している。上から3.5cmのところには両側からV字状の切り欠きが入っている。6は長さ17cm 5に形態は似ていて、上部3ほどの所に両側から粗雑に切り欠きが入っている。またこの切り欠きの所から下方に長さ9mmの線状の切り込みがあるが、5のような釘穴状でもなく、また裏まで貫通してはいない。さらに上部先端を両面から削っている点も5と異なる。

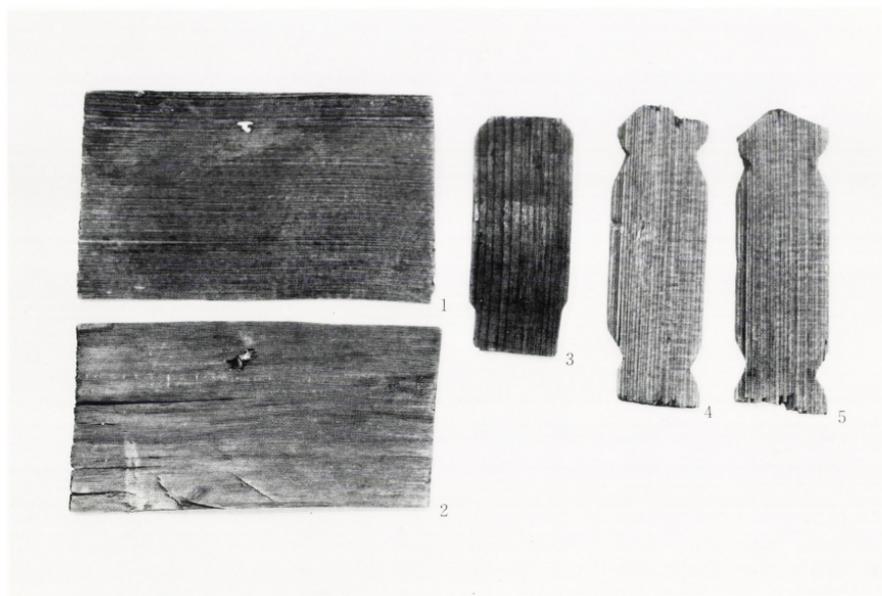
4は長さ10.3cmほどで、一方の側辺にはゆるやかなカーブがある。上部から1.5cmほどの所に、カーブのない方の側辺に1箇所切り欠きが見られる。下方先端はやはり削って尖らせてある。

第8図4と5は2枚が重なって出土した。頭部は圭形を呈し、2箇所両側に切り欠きがある。下部は明らかに折損しており全長は不明である。2枚の主頭や切り欠きの状態は2枚とも同形同位置にあり、出土状態も2枚が重なっているという点を考えると、2枚1組として製作され使用された可能性が大である。

3は上部両角が隅切りとなっており、下方にも同様の切り込みがあって隅切角となっている。下方は折れた状態にみえるが、折れ口はギザギザでなくなめらかであり、そのすぐ上には曲げ物にみられるような刻み目が入っている。したがってこれは折れ口ではないのかも知れない。

1と2はごくうすい長方形の木片であり、1辺のみがやや雑な感じであるが、他の3辺はきれいになっている。上部中央付近に釘穴と思われるものが、2枚とも同位置に穿たれているが、2の方のみ穴は2箇所あるので、2回目の使用

ということも考えられる。



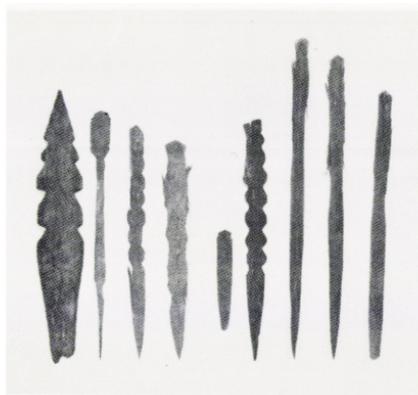
第8図 木製品(2)

## 第4章 ま と め

**年代** 町教委で発見した当時土器と思われたものは、現地調査の結果古井戸を斜めに切ったものを見誤ったものであった。

この井戸の年代決定する手がかりは、文献等からの古館の館主の検討、古井戸内出土の土器片や木製品の検証などがある。土器片については、土師器の範囲から離れてはいるが土師質土器であることは確かである。ただ編年的研究が当地方ではまだ始まったばかりであって、何世紀かを決定するまでにいたらない。木製品の種類や用途などから時代を決めることもあるが、今回の資料を該当させるにはちゅうちょする。従ってここでは古館の年代から12世紀以降であり、井戸の廃絶後の投入物と一応理解しておきたい。

**木製品** 11点の木製品は形態・用途からみて数種類に分離できる。興味を引くのは齋串の一群である。齋串は大きくわけて両側面にV字形



第9図 東北各地の齋串  
（「発掘された古代の東北」より）

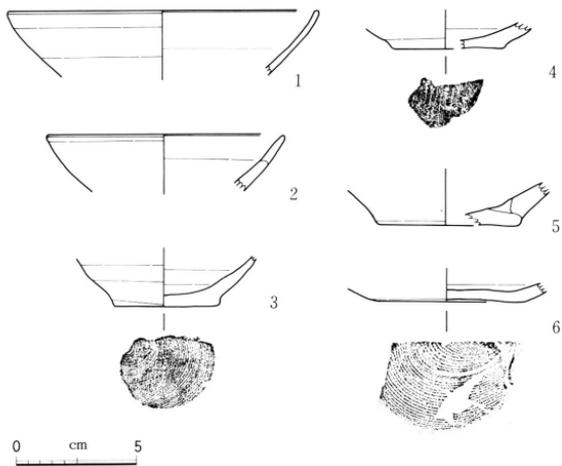
の切り込みのあるものと、頭部や両側面に切り掛けのあるものがある。今回の第11図5と6は前者に属するものである。細かな切り掛けを施したものは今回の資料には見られない。4も齋串にみられる切り込みは1個所のみにみられるが、シンメトリーな形態をとっておらず、異なるものかも知れない。

齋串の中には箸状のものに切り掛けを2～3個所施したものがある。今回の第11図1と2は切り込みや切り掛けが全くみられないので杉箸と考えたが、形態的に似たものとしては「とめ串」がある。藁屋根の藁をとめるのに使用されたという。薄板札状の齋串にも切り込みや切り掛けのないものがあるので、棒状の今回資料も齋串の一種と見ることも不可能ではない。

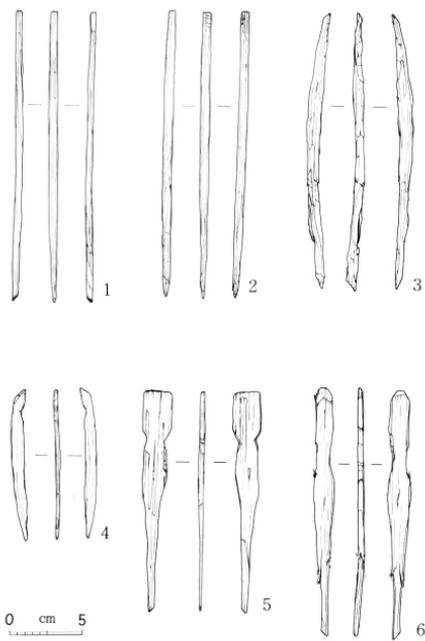
薄板のカード状のものは釘穴があって、何かに打ちつけた後井戸内に投入されたものであろう。薄板には黒い汚れが多少みられるが、文字や絵を読みとることはできない。今後赤外線TV投影等による調査が必要である。

他遺跡での齋串の出土状況を見ると、井戸・溝が多い。時代的には6世紀中頃からみられるようである。用途としては、祭祀遺物であることは確かである。まつりの具体的な姿はむずかしいが、井戸や溝などからの出土が多い所から、水に関連するまつりを想定することができる。それから発展する農耕儀礼にもかわるのか否かはここでは触れない。

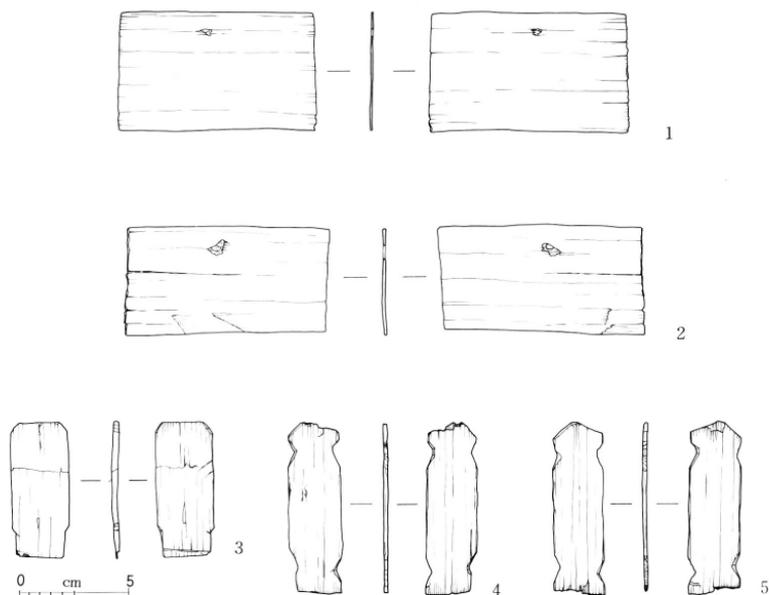
本報告書作成にあたり県教育庁文化課および同分室職員には種々御指導をいただいた。とくに市川佐知子氏には実測・トレースでお世話になった。



第10图 出土土器实测图



第11图 出土木製品实测图(1)



第12図 出土木製品実測図(2)

## 【参考文献】

東北歴史資料館：宮城県多賀城跡調査研究所

1979「発掘された古代の東北」

黒崎直

1976「齋串考」『古代研究・10』

兼康保明

1980「井戸における齋串使用の一例」『古代研究・19』

広島県教育委員会

1971「草戸干軒町遺跡1971年度発掘調査概報」

矢吹町教育委員会

1975「目でみる矢吹町史」

矢吹町文化財調査報告 第5集

## 古館遺跡調査報告

印刷発行 昭和57年3月20日  
編集 渡辺 一雄 (県教育庁文化課)  
星 圭之助 (矢吹町教育委員会)  
発行者 矢吹町教育委員会教育長 酒井 正 敏  
発行所 福島県矢吹町教育委員会

